

せっかく「好き放題」というお題を頂戴したので、こういう機会でないとなかなか書けないことを。

本誌は「情報処理」、発行する学会は「情報処理学会」である。「情報処理」という言葉がいつごろから日本語になったのか分からないが、1960年の学会設立当初からの名前だから、それよりは前になる。1970年に「情報処理振興事業協会等に関する法律」（1985年に「情報処理の促進に関する法律」と改題）が施行されているが、そこでの定義は「電子計算機を使用して、情報につき計算、検索その他これらに類する処理を行なうこと」である。これは現在の「情報処理」という言葉の用法とさほど異なっていない。

「情報処理」という言葉の由来は“information processing”の直訳ではないかと思われる。この“information processing”は、「人の認知活動は（電子計算機と同様の）情報加工の過程として理解できる」というときに使うことが多いように思う。この用法での“information processing”は、人の知的活動（の少なくとも一部）を含むものであって、日本語の「情報処理」の「電子計算機を使用して」というニュアンスとはかなり異なる。

それはともかく、“processing”を「処理」と訳したのはいかかなものだろう。手もとの岩波書店刊の広辞苑第六版（2008年発行）の与える「処理」の第一義は、「物事をさばいて始末をつけること」である。「さばいて始末をつける」とは何のことか分かりにくい。用例として「苦情を一する」をあげており、「そのままにしておく」と具合が悪いものごとに対して、なんとかしてその具合悪さを解消する」という意味かと思われる。「汚物処理」「下水処理」などがこの使い方になる。

もちろん「情報処理」は「始末をつける」のではなからう。さすがに広辞苑第六版は第二義として「材料に加工を施して性質を変えること」を与え、用例として「熱処理」と「情報処理」をあげている。「熱処理」

にはぴったりだが、「情報処理」が「材料の性質を変える」というのにはやや違和感があるが、違うともいえまい。

しかし「加工を施す」という意味での使い方は、比較的新しいもののように思える。幸い広辞苑第三版（1983年発行）も手もとにあったのでこれを見ると、上述の第一義にあたるものだけがあり、「加工」にあたる意味は記載されていない。一方「熱処理」や「情報処理」という項目はあり、「情報処理」は「数字・文字・物理量などによって表された情報について、電子計算機により計算・分類・照合その他の処理を行うこと」と、これは第六版とまったく同じ語義を与えている。同じ版の広辞苑に従って素直に意味をと

応
般

[シニアコラム]

IT 好き放題



[No.45]

「情報処理」という言葉

れば、「数字・文字・物理量などによって表された情報」はどれも具合が悪いので「さばいて始末をつける」ということになってしまう。

英語の“process”には、広辞苑第六版の「処理」の第一義のような意味はない。下水処理は“sewage disposal”あたりが普通だろう。苦情処理は“complaint procedure”というが、本音は“dispose”したいがそれではブーイングなので、ニュートラルな“procedure”を選んだように思える。つまり「処理」は“disposal”に対応しそうなのである。なぜ“process”の訳にこんな語感の「処理」という言葉をあてたのか、理解に苦しむ。

というわけで、「情報処理」はどれも気に入らない。学会設立時にも反対は少なくなかったようだ。では何がよいか、というとなかなかよい代案もない。「情報加工」では「捏造」と混同されかねない。言葉の意味としては「情報変換」あたりでも適切だろうが、学問分野をカバーできない^{うら}憾みがある。いや、そもそも「情報処理」という言葉が、この広い分野をカバーできていないのだ。明治初年の碩学のような漢籍の素養を身につければ、もう少しましな言葉を見つけられるだろうか。

（2014年7月25日受付）

近山 隆 Takashi CHIKAYAMA

UHM

[正会員] takashi.chikayama@gmail.com

1982年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了、工学博士。同年より第五世代コンピュータプロジェクトの研究開発に従事。1995年より東京大学。現在同名誉教授。2014年より現職。専門分野はプログラム言語と処理系、並列分散処理、機械学習など。